大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第39集

小林遺跡
上田遺跡群
馬場遺跡

2009

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序　　文

本書は、県教育委員会が別府土木事務所及び豊後大野土木事務所の依頼を受けて実施した日出真那井杵築線交通安全事業に伴う小林遺跡、百枝浅瀬野津線道路改良事業に伴う上田遺跡群、山内新殿線橋梁整備事業に伴う馬場遺跡の３遺跡を合わせた発掘調査報告書です。

小林遺跡の所在する日出町大神は、別府湾に近い台地上に位置します。周辺には伊勢森古墳や海岸部には旧石器時代～縄文時代前期の遺跡としてよく知られている早水台遺跡が所在します。今回調査においては、この地域には類例の少ない遺構である中世の墓が発見されました。

上田遺跡群は西向きの斜面に造られた塚状の遺構です。周辺には県指定・立野古墳など多くの古墳が分布しているが、この遺構は近世以降のモニュメントと想定されます。

馬場遺跡では弥生時代と古墳時代の溝などが発見され、特に弥生時代の溝からは前期の壺などが出土し、注目されました。周辺には上門手遺跡など中世の遺跡を散見できますが、弥生時代の集落はよく知られていません。馬場遺跡の調査によって、この地域の弥生時代集落の存在を示す貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助となれば幸いです。

終わりに、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申しあげます。

平成21年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長　佐　藤　英　一

例　　言

1　本報告書は、大分県教育委員会が平成19年度に実施した日出真那井杵築線交通安全事業に伴う小林遺跡、百枝浅瀬野津線道路改良事業に伴う上田遺跡群、山内新殿線橋梁整備事業に伴う馬場遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、大分県土木建築部別府土木事務所、豊後大野土木事務所の依頼を受けて、大分県教育委員会が実施した。

3　遺物の整理作業、実測・トレース・写真撮影は、教育庁埋蔵文化センター（以下、センターという。）職員が実施した。

4　出土遺物及び関係資料は、センターで保管している。

5　本書で使用した地形図（1／25,000）は国土地理院作成のものを利用した。

6　本書の執筆・編集は、センター調査第一課一般事業担当小林昭彦が担当した。

本 文 目 次

序文

例言

第１章　はじめに …… 1

　第１節　調査の経過 …… 1

　第２節　調査組織の構成 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 2

第３章　調査の成果 …… 4

　第１節　小林遺跡 …… 4

　第２節　上田遺跡群 …… 6

　第３節　馬場遺跡 …… 8

第４章　総括 ……15

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　調査遺跡位置図 …… 2
第２図　調査地区及び周辺遺跡分布図 …… 3
第３図　小林遺跡位置図 …… 4
第４図　遺構及び出土遺物実測図 …… 5
第５図　塚状遺構実測図 …… 6
第６図　上田遺跡群(上田原地区)位置図 …… 7
第７図　馬場遺跡位置図 …… 9
第８図　馬場遺跡１区遺構実測図 …… 10
第９図　溝１土層断面図 …… 11
第10図　溝１遺物集中範囲図 …… 11
第11図　馬場遺跡２区遺構実測図 …… 12
第12図　溝１出土遺物実測図 …… 13
第13図　２区及び周辺出土遺物実測図 …… 14

写真図版目次

図版１　小林遺跡遠景　中世墓全景　完掘時全景
図版２　上田遺跡群塚状遺構遠景　塚状遺構全景　塚状遺構北側土層
図版３　馬場遺跡遠景　溝１全景　溝２全景
図版４　１～10、14～30(馬場遺跡出土遺物)　30・31(小林遺跡出土遺物)

第１章　はじめに

第１節　調査の経過

今回報告する遺跡は、小林遺跡、上田遺跡群上田原地区、馬場遺跡の３遺跡である。

所管する土木事務所は、小林遺跡が別府土木事務所、上田遺跡群、馬場遺跡が豊後大野土木事務所である。

小林遺跡

日出町大字大神字小林に計画された日出真那井杵築線交通安全事業に伴う本調査を平成19年５月21日から５月23日の３日間実施した。調査は同４月13日に立会調査を実施したところ、起点側に土坑１基を確認したため、実施したものである。本調査の結果、土坑は平安時代末～鎌倉時代初頭と推定される墓であった。出土遺物として、覆土中から土師器細片と土錘２点を検出した。周辺部の確認を行ったが遺構はこの墓１基であった。

上田遺跡群上田原地区

豊後大野市三重町大字上田原に計画された百枝浅瀬野津線道路改良事業に伴う本調査を平成19年９月３日から９月６日の４日間実施した。遺構は既に分布調査で確認されていたが、円墳状の高まりを呈していた。当該地区の清掃によって、この遺構が全面を礫で覆われた人為的な構築物であることを確認した。調査の結果、規模が径８ｍ、高さ1.6ｍ程度の塚状遺構であることを確認した。遺構の性格は不詳であるが、近世陶磁器の破片が確認されており、江戸以降の造営と考えられる。

馬場遺跡

豊後大野市千歳町新殿に計画された山内新殿線橋梁整備事業に伴う本調査を平成19年５月28日から６月１日の５日間実施した。当該地の事前調査は、平成19年４月19日に試掘調査を実施し、溝状遺構を確認したため本調査が必要となった。

調査の結果、弥生時代の溝２条、土坑１と古墳時代の溝１条を検出した。特に弥生時代の溝から前期の壺型土器が出土し注目された。

第２節　調査組織の構成

埋蔵文化財センター所長		福田快次
	次長兼調査第一課長	坂本嘉弘
（調査担当）	調査第一課主幹	小林昭彦
	同　副主幹	綿貫俊一
（調査事務）	次長兼総務課長	岡本義博
	同　副主幹	炭本明男
	同　主査	佐藤公文

第２章　遺跡の位置と環境

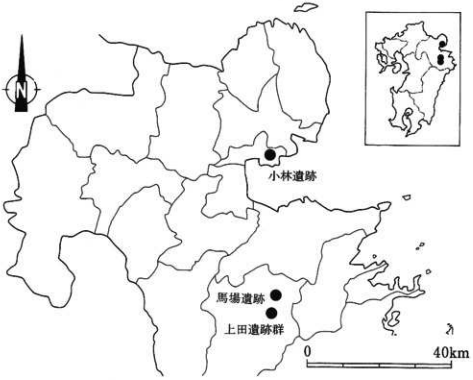
３遺跡の所在する地形や歴史的な環境について、各遺跡毎に説明を行う。

小林遺跡

遺跡の所在する大神地区は、東部に金井田川が流れており、南大神付近で向きを東から南東へ変え、別府湾へと注いでいる。調査地区は標高45ｍ程度と最も高い位置にあり、北部の斜面は金井田川に向かい緩やかに傾斜し、南斜面は別府湾へ向かい同様に緩い傾斜をなしている。周辺遺跡の分布状態をみると、南東へ約2.5ｋｍの川崎・西小深江には、旧石器時代～縄文時代前期の遺跡としてよく知られている早水台遺跡が位置する。近いところでは、東１ｋｍには大神焼の甕棺が調査された伊勢森遺跡や伊勢森古墳１～６号墳が所在する。大神焼は文献上では戦国時代に遡る陶器の可能性があり、製作は小林遺跡の北部にあたる中村の土師屋、西の鶴での記録が残っている。本遺跡の北約700ｍの丘陵裾部付近には中世城館の石松城（石松館跡）、旧石器時代の小招遺跡、弥生時代のミゾゲ遺跡、中村古墳など周辺には散在的であるが、各時代の遺跡が所在する。

上田遺跡群（上田原地区）

遺跡の所在する上田原地区は大野川が谷を深く開析し、蛇行しながら北東へ流れる右岸の台地上に位置する。調査地区は周知の埋蔵文化財包蔵地「上田遺跡群」内に位置するが、北から延びる丘陵の西斜面にあたる。周辺の遺跡として同じ丘陵の上部平坦面に旧石器時代ほかの上田原東遺跡が知られており、南には古墳時代の石棺で構成された墳墓「鉢ノ窪石棺群」、県指定の「立野古墳」が所在する。



第１図　調査遺跡位置図

馬場遺跡

遺跡の所在する千歳町新殿は上田遺跡群とは大野川を挟んで北の台地上に位置する。調査地区は北部を北東へ流れる茜川が形成した沖積平野に所在する。周辺の遺跡の分布は、同じ沖積平野の南西400mに大園遺跡、さらに南部の丘陵先端の平坦面に上門手遺跡が所在する。大園遺跡は三重新殿線の工事に伴う平成12年度の調査で12世紀後半の掘立柱建物群や土坑墓が確認され、中世村落の形態が明らかにされた。また上門手井遺跡は同じ三重新殿線に伴い平成13年度の調査で古代～中世の遺構が検出された。特に、丘陵上部には中世・戦国時代の遺構が確認された。土塁、溝、土坑、地下式土坑、掘立柱建物跡、虎口、周辺部には堀切や切岸などで構成された館跡であった。この地域の中世の景観を示す発見であった。弥生時代～古墳時代の遺跡としては、茜川を挟んで北部の台地上に新殿岡遺跡や高添遺跡が所在する。中九州道路に伴い平成12年度から13年度に発掘調査が実施され、住居跡や土坑が発見された。

周辺遺跡一覧表

[杵築]

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代
200001	新殿遺跡	新殿町	弥生時代
200002	大野川遺跡	大野町	古墳時代
200003	大日ヶ丘遺跡	新殿町	弥生時代
200004	高添遺跡	高添	古墳
200005	神楽丘遺跡	城北	古墳
200006	神楽丘遺跡第2地点	城北	古墳
200007	神楽丘遺跡第3地点	城北	古墳
200008	神楽丘遺跡第4地点	城北	古墳
200009	神楽丘遺跡第5地点	城北	古墳
200010	城北遺跡	城北	古墳
200011	新殿遺跡	新殿	弥生時代
200012	新殿遺跡	新殿	弥生時代
200013	新殿遺跡	新殿	弥生時代
200014	大日ヶ丘	新殿	古墳
200015	大日ヶ丘	新殿	古墳
200016	大日ヶ丘	新殿	古墳
200017	大日ヶ丘	新殿	古墳

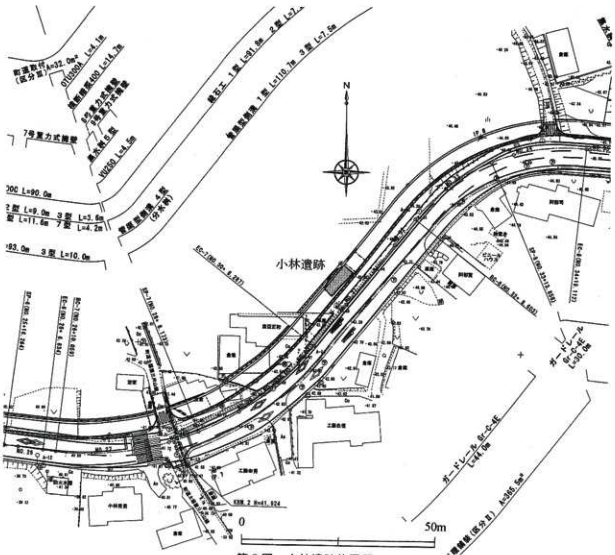
第３章　調査の成果

第１節　小林遺跡（第3・4図）

調査は県道拡幅に伴う工事予定地のうち、現道北側の約30㎡を対象とした。遺構は地表面から0.65mで確認できた。

調査地区の土層堆積状態をみると、上層から１は撹乱・耕作土、約0.3m、２は暗褐色土層（遺物包含・焼土粒を含む）、0.4m、３は暗褐色土層（黒ボク）、0.12m、４は暗黒色土層（黒ボク）、0.15m、５は橙色土層（アカホヤ）、0.1m、６は黄色土層（ローム層）であった。

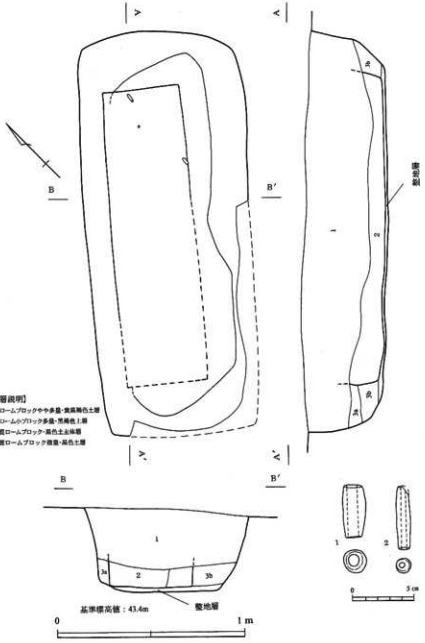
遺構は墓と考えられる。掘形は南東部１/４を失っている。規模は長軸2.1m、短軸0.85m、0.7m、深さ0.45mである。埋葬主体部は掘形底面及び堆積土の状態から木棺と想定された。主体部は掘形の長軸に沿いやや西に寄った位置に置かれていた。規模は、1.6m×0.4mであった。掘形の覆土を観察すると、１は混ロームブロックやや多量・黄黒褐色土層で、埋葬後の埋土。２は混ローム小ブロック多量・黒褐色土で、棺内への流入土。３は黒色土とローム混在層で木棺の裏込・充填土とみられた。



第３図　小林遺跡位置図

出土遺物（第４図１・２）

ともに土錘の完形品である。１は長さ4.2cm、幅1.8cm、孔径0.8cm～0.9cm、重さ12.9ｇと、やや幅が広い形状を呈す。２は長さ4.9cm、幅1.2cm、孔径0.3cm、重さ5.4ｇと細くやや軽い。

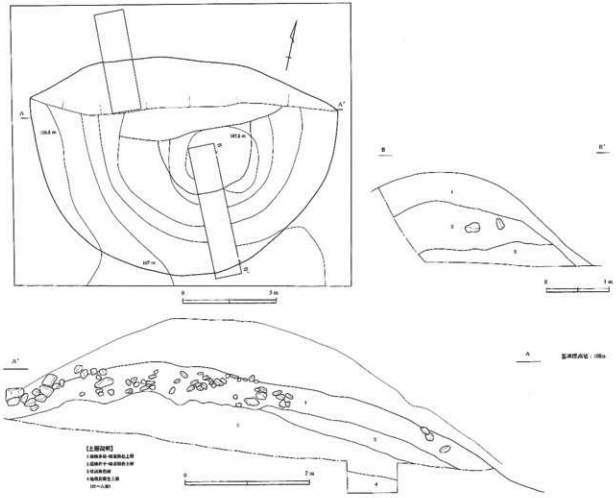


第４図　遺構及び出土遺物実測図

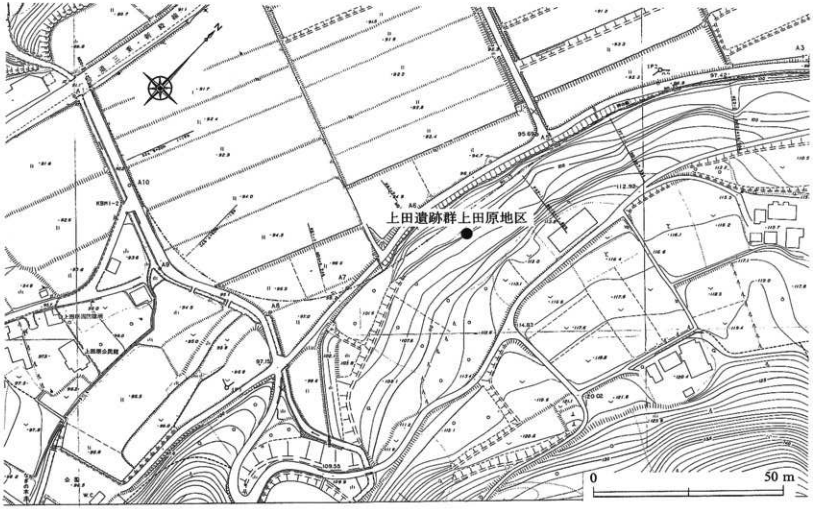
第２節　上田遺跡群（上田原地区）（第5・6図）

調査の対象になった塚状遺構は、北西に向かって傾斜する斜面の平坦面に位置していた。当該地は畑地として造成されており、造成後にこの遺構が造られたものと考えられる。塚の形状は北部１/３を欠くが、径８ｍ、裾部から頂部までの比高約1.6ｍの規模をもち、円形を呈する。塚状遺構の北側は道路で切られており、その土層断面で構築状況を確認した（第５図Ａ－Ａ′）。上層から１層は礫主体層で0.1ｍ～0.3ｍの礫を主体とし、暗黄褐色土層を混じ、厚さ0.2ｍ～0.55ｍ。２層は混礫若干・暗黄褐色土層で、厚さ0.3ｍ程度。３層は地山で0.4ｍ～0.8ｍ、その下層は黄色ローム層となる。このように塚は３層の地山の上に２層、１層を積み上げて構築している。南北方向のトレンチで土層（第５図Ｂ－Ｂ′）においては、上層から１層、２層、３層と土層断面Ａ－Ａ′と同様の土層堆積状態であった。

出土遺物は頂部付近、盛土内から陶磁器類が若干みられた。ただ、遺構に伴う遺物の特定は困難であった。



第５図　塚状遺構実測図



第６図　上田遺跡群（上田原地区）位置図

第３節　馬場遺跡（第7～第13図）

平成19年４月19日に実施した試掘調査の結果、溝状遺構が確認されたため、本発掘調査を実施した。調査は平成19年５月28日～平成19年６月１日までの５日間実施した。調査区は試掘調査で遺構が確認された２箇所である。調査面積は１区が113㎡、２区は67㎡の計180㎡であった。

調査は、試掘調査で遺構を確認した１・２区を対象に地表下0.5m～１mの遺構確認面までを重機（バックフォー）を使用して表土等を除去し、その後人力により遺構の検出・掘下げ作業を行った。１区では溝１条、２区では溝２条・土坑１基を検出し、調査を実施した。出土遺物として弥生土器、土師器、須恵器などがある。

（１区）

１区では調査区の精査を行った結果、溝１条（溝１）を確認した。

調査区内での長さが12m、幅0.6m～1.4m、確認面からの深さ0.2mの規模であった。南西から北東方向に伸びる。両端底面の高低差は少ないが、北東方向に傾斜すると考えられる。溝の南西端付近の南壁際から底面にかけて２m×1.5mの範囲に土師器、須恵器破片が集中して出土した。

（２区）

２区では溝２条（溝２・３）と土坑１を確認した。

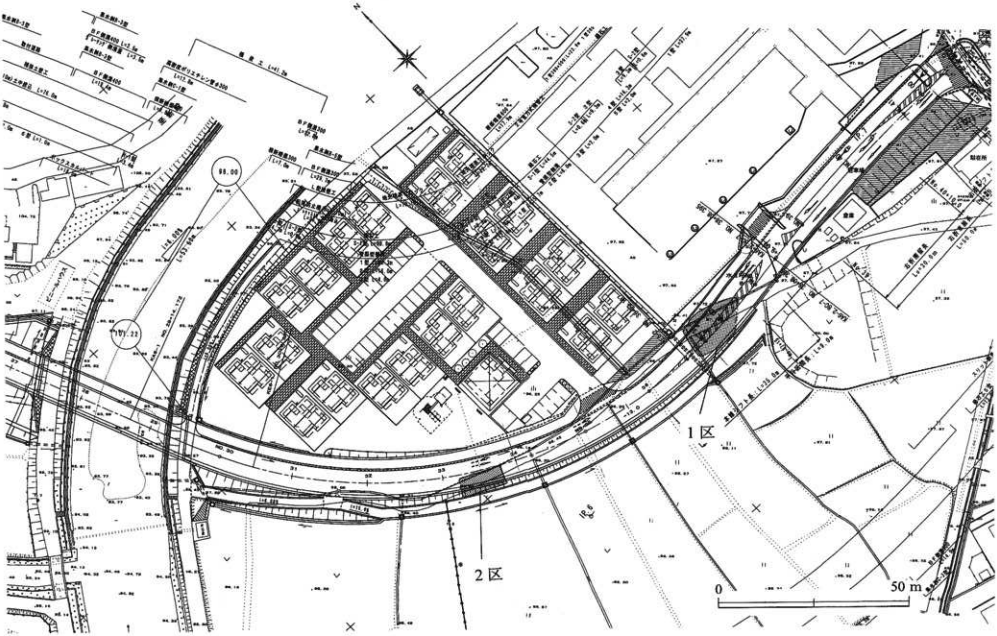
溝２は調査区内での長さ７m、幅1.5m～2.5m、確認面からの深さ0.8m～１mと深い。底面両端の高低差は少ないが、南西から北東方向へ傾斜しており、南西端は溝３に切られている。北東に向かい広がり、北端部でやや西へ屈曲する形状を呈す。断面形は南半部で付近が狭まる。溝の堆積土は、上層から①軟質黒黄褐色土層、②混砂粒若干・黄黒褐色土層、西壁際に地山の崩落土とみられる③砂質黄褐色土主体層、東壁際に④粘質黒黄褐色土層、⑤混黄褐色土小ブロック若干・黒褐色土層、最下層が⑥混黄褐色土ブロック・炭化材若干・粘質黒褐色土層であった。溝の覆土下層から弥生前期の壺形土器が出土しており、溝がこの時期に構築されたものと考えられる。

溝３は長さ5.3m、幅１m～1.2m、深さ0.2m～0.3mの規模をもつ。溝２と比べると浅い。溝は溝２と同様に南西から北東方向に伸びる。両端底面の高低差は少ない。溝の堆積土は、上層から①黄黒褐色土層、②黒黄褐色土層、③混黄褐色土ブロック若干・黒褐色土層であった。溝内の覆土から弥生中期の壺形土器破片が出土している。

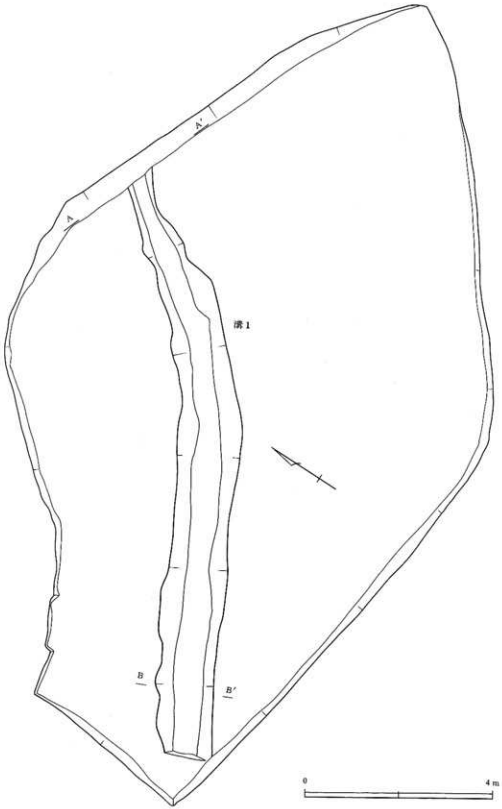
土坑１は２区の西端部で検出した。長径1.9m、深さ0.5mの規模をもつ。覆土から弥生土器片が若干出土した。

出土遺物（第12図・第13図）

溝１出土遺物（第12図１～14）には、弥生土器、土師器、須恵器などがみられる。１～５は甕形土器の口縁部破片である。このうち１～３は２条刻目突帯をもつ。１は口縁部外面に１条刻目突帯がつく。２・３は口縁部のやや下に２条付く。胎土には角閃石、石英、長石粒を含む。焼成は良好で黄褐色～暗褐色を呈す。調整は内外面ともヨコナデを施す。４・５は、無刻目突帯の甕である。６は壺胴部付近の破片である。７は壺の口縁部で強く外反する。胎土には径１～３㎜の角閃石・長石粒を多量に含む。焼成は良好で淡茶褐色を呈す。調整は内外面ともヨコナデを施す。８は甕形土器で長目の胴部に短く「く」字状に屈曲する口縁部をもつ。底部は丸底をなす。調整は口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面に縦・斜方向のハケ目、内面に横方向のハケ目・ナデ状の調整が施されている。復元口径17.4㎝、器高31.3㎝である。胎土に長石、角閃石、石英粒を多く含む。調整は良好で淡黄褐色を呈す。底部外面に一部黒斑がみられ、内面にはスス状の炭化物が付着している。９は甕の胴



第7図　馬場遺跡位置図

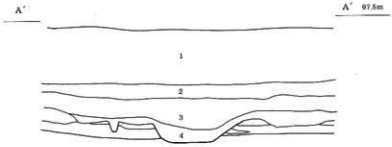


第8図　馬場遺跡1区遺構実測図

部で、球体状に張り丸底をなす。外面に縦・斜方向の粗いハケ目、内面にヘラ削りが施されている。外面にはススが付着している。また、底部内面にはコゲがみられる。胎土に石英粒を多量、角閃石粒を少量含む。調整は良好で、淡褐色を呈す。10は古式土師器で、壺形土器の口頸部破片である。口縁部は短い頸部から屈曲して立ち上がる。口頸部の調整はハケ後、横ナデが施される。復元口径11.6cmである。胎土に角閃石・赤色砂粒を多量、石英粒を少量含む。焼成は良好で淡褐色を呈す。11・12は須恵器坏蓋の天井部付近破片である。11には外面に回転ヘラ削が確認できる。焼成は堅緻であるが外面は黄灰褐色を呈しやや不良。12は焼成は青灰色を呈し良好である。ともに胎土に砂粒はあまり含まない。13は須恵器甕類の破片で外面に平行タタキが残る。14は凝灰岩製の砥石である。大きさは8.8cm×7.4cm、厚さ5.5cm～6.5cmの矩形を呈す。3面に使用痕跡が確認できる。

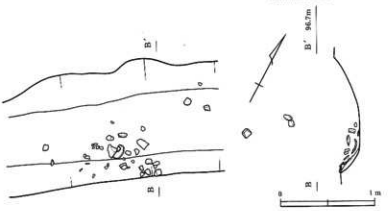
溝2出土遺物(第13図15～19)は、弥生土器である。

15は壺形土器で口縁部～胴部上半が残る。胴部は球体状に張る。頸部は基部が太く、内傾して立ち上がる。口縁部は短く外へ開く。頸部と胴部の境及び頸部と口縁部の境に凹線をもつ。大きさは復元口径12.4cm、頸部の基部で15.2cmである。肩部に3条の重弧文状のヘラ描文が施されている。施文の連続する部分を欠くため、文様の構成は不明確である。現存する胴部の2箇所に施文部分を確認でき、その間隔から施文は3箇所あったと思われる。胎土に長石・石英粒を多量、角閃石粒を少量含む。焼成は良好で黄褐色を呈す。調整は内外面とも丁寧なナデを施す。16は口縁部直下に突帯をもつ。胴部下半欠くが甕と考えられる。17は甕形土器の口縁部破片である。口縁部下に刻目突帯をもつ。口縁部内外面にナデを施し、突帯の下には斜方向のハケ目がみられる。胎土に長石・角閃石粒を多量、石英粒を少量含む。焼成は良好で橙褐色を呈す。18・19は壺の底部と思わ



第9図　溝1土層断面図

【土層説明】
1 明灰褐色粘質土層（耕作土）
2 暗黄灰褐色土層（床土）
3 黄褐色土層
4 粘質粗砂黒褐色土層

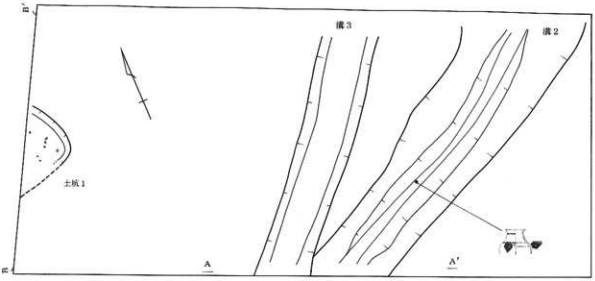


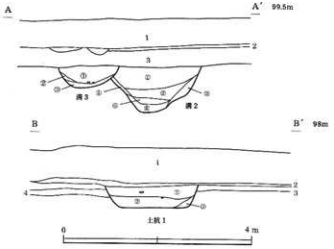
第10図　溝1遺物集中範囲図

れる。平底を呈す。18は復元底径10.6cmで、内面にナデがみられるが、外面は剥離しており不明。焼成は良好で橙褐色を呈す。19は復元底径8.8cmで外面に縦方向ハケ目後ナデがみられる。内面は摩滅しており調整は不明。胎土に角閃石・石英粒をナデがみられるが、外面は剥離しており不明。焼成は良好で橙褐色を呈す。

溝３出土遺物(第15図20～26)は、弥生土器である。

20～22は甕形土器の口縁部破片である。口縁部下に刻目突帯をもつ。１は口縁部外面に１条刻目突帯がつく。ともに胎土には角閃石、石英、長石粒を含む。焼成は良好で淡橙色～暗褐色を呈す。調整は内外面ともヨコナデを施し、22の突帯下には斜方向のハケ目が残る。23・24は壺の胴部破片である。23は３条の刻目突帯が貼付されている。24は１条の突帯がみられる。ともに内外面にナデが施されている。胎土に長石・角閃石粒が多く含まれている。焼成は良好で淡茶褐色を呈す。25は壺の口縁部で頸部から長く伸びる形状と思われる。外面に縦方向のハケ目が残る。内面はヨコナデが施されている。胎土に長石粒が多量に含まれる。焼成は良好で橙褐色を呈す。26は甕の底

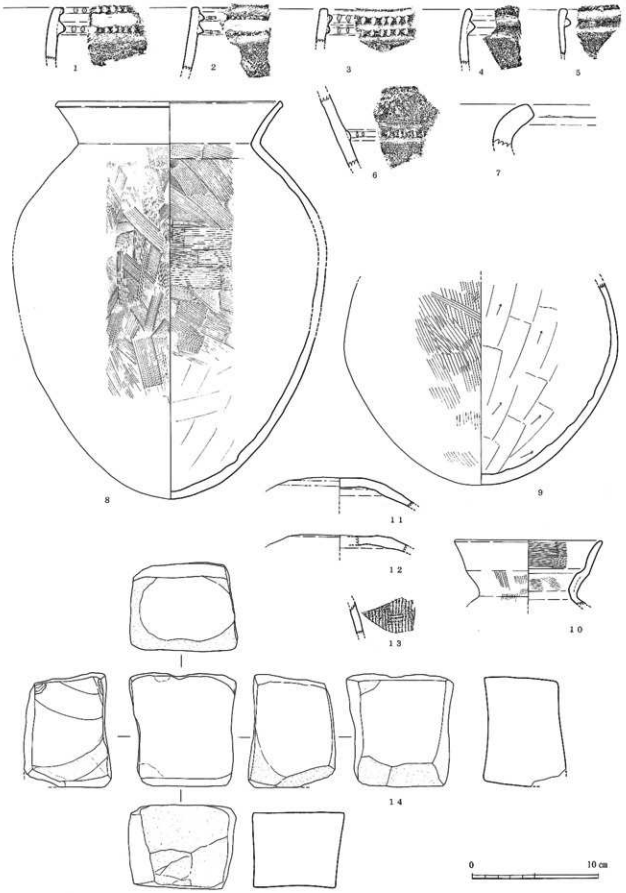




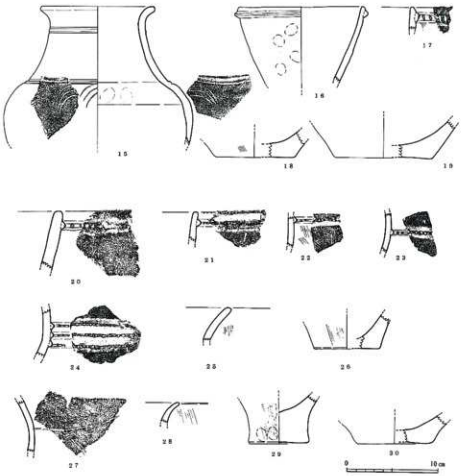
【土層説明】
１暗灰褐色粘質土層（耕作土）
２硬質黒褐色土層（床土）
３炭褐色土層
４暗黄褐色土層
（溝２覆土）
①軟質黒黄褐色土層
②混砂粒若干・焼黒褐色土層
③砂質黄褐色土主体層
④粘質黒黄褐色土層
⑤混黄褐色土小ブロック若干・黒褐色土層
⑥混黄褐色土ブロック・炭化材若干・粘質黒褐色土層
（溝３覆土）
①黄黒褐色土層
②黒黄褐色土層
③混黄褐色土ブロック若干・黒褐色土層

（土坑１覆土）
①黒黄褐色土層
②粘質黄褐色土層
③黄褐色土ブロック

第11図　馬場遺跡２区遺構実測図



第12図　溝１出土遺物実測図



第13図　2区及び周辺出土遺物実測図

部破片で、復元底径7㎝である。胴部下端の外面に縦方向ハケ目、底部内外面にナデがみられる。胎土に長石・角閃石・石英粒が多く含まれ、焼成は良好で茶褐色を呈す。

土坑1出土遺物(第15図27)

土坑1から出土した土器は、弥生時代の壺胴部破片である。調整は内外面ナデが施されている。焼成は良好で黄褐色を呈す。

その他(第15図28～30)

28は1区の表採資料である。弥生時代の甕口縁部である。外面に縦方向のハケ目後ヨコナデ、内面にヨコナデがみられる。胎土に長石・角閃石粒、赤色砂粒を含み焼成は良好で淡褐色を呈す。29・30は2区の表採資料である。29は弥生時代の甕底部の破片で、復元底径6.4㎝である。胴部下端の外面に縦方向ハケ目、指圧痕、底部内外面にナデがみられる。胎土に長石・角閃石粒が多く含まれ、焼成は良好で茶褐色を呈す。30は壺の底部で復元底径7㎝である。胴部下端の外面にケズリ後ナデ、底部内外面にナデがみられる。胎土に長石・角閃石粒が多く含まれ、焼成は良好で茶褐色を呈す。

第4章　総括

小林遺跡

遺構は木棺を埋葬主体とする中世の墓1基であった。出土遺物は土錘や土師質土器の細片のみであり、被葬者の性格や時期の特定が困難であった。立地的には丘陵の南縁辺部に近い平坦部にあたる。同様な地形の延長上で試掘を行ったが遺構の広がりは確認していない。この地域で中世遺跡をみると、城跡とされる石松遺跡や伊勢森遺跡を指摘できる。伊勢森遺跡は発掘調査で大神焼きの甕を用いた墓が発見されたが、この甕の年代観は確定していない。したがってこの地域における中世墓地に関する資料は少なく、今回調査を行った木棺墓は当該地の中世墓制の一面を示すものといえよう。

上田遺跡群(上田原地区)

塚状遺構は径8m、高さ1.6mの円形を呈していた。当初は周辺部に古墳の分布が顕著である点などから、円墳を想定した。しかし、構築状況が地山整形をすることなく版築を伴わない粗雑な盛土、さらに小礫主体土で被覆する外部構造であった。盛土の断割り調査の結果、下部構造をもつものではなく、明らかに古墳ではなかった。立地は斜面裾部に近い位置となるが、旧地形を畑地等造成し平坦となった縁辺である。被覆した礫土の残存は削られた形跡はなく、造成後に塚状遺構が造られたことになる。当該地の造成時期は不明であるが、おそらく近世以降と思われる。ただ周辺の聞き取り調査・文献等によっても信仰の対象としての存在を確認するには至らなかった。

馬場遺跡

溝3条と土坑1基を調査した。このうち溝1は6世紀後半である。注目されるのは、溝2であり、溝の底面近くから前期の壺形土器が出土した。壺形土器は底部～胴部下半を欠くが、口頸部から胴部上半に器形をみることができる。器形の特徴として、長く伸びる口頸部、内傾する太い頸部、肩の張る胴部、さらに頸部と胴部の境及び口縁部と頸部の境に削り出し突帯が沈線化した凹線を確認できた。このような壺形土器は、大分市下志村遺跡で良好な資料が得られ、体系的な整理が示されている(注1)。この編年において、下志村2式の壺は頸部と胴部の境に削出し突帯を有する点が特徴である。国東半島東部の国東市武蔵町内田遺跡出土の2点が知られており、前期初頭～中葉とされる。下志村3式は口縁部と頸部及び頸部と胴部の境に沈線を巡らせる点が特徴である。宇佐市台ノ原遺跡、同市安心院町宮ノ原遺跡など県北地域や大分市雄城台・多武尾遺跡など東部で知られており、前期後葉とされる。このように県東・中部及び北部にその分布状況が確認されていた。馬場遺跡の壺形土器は、頸部と胴部の沈線は、下志村3式の沈線に先行する要素もち下志村2式の典型よりも後出である。したがって、下志村2式と3式の間に位置づけられ、時期は前期中葉と考えられる(注2)。

大野川上中流域の前期土器は豊後大野市大野町夏足原遺跡・宮迫遺跡・駒方遺跡、同市千歳町高添遺跡、竹田市小高野遺跡・ネギノ遺跡が知られている。この地域は縄文晩期の刻目突帯文甕が型式変化した甕と短かく外反する口縁部、やや球状の胴部、平底をもつ壺が伴うとされていた(注3)。今回馬場遺跡でこの種の壺形土器が出土したことは、下志村2式の分布が大野川下流から中流域への波及を示すものである。

注1 高橋徹「大分の弥生・古墳時代土器編年」(『大分県立博物館研究紀要2』)大分県立歴史博物館 2001年3月

注2 当該型式の変遷や内容及び型式概念については、高橋徹氏の教示による。

注3 高橋徹「第二節弥生文化の成立」(『大分県史』先史編Ⅱ)大分県、1989年

写真図版

小林遺跡遠景（北方向から）

中世墓全景（北方向から）

完掘時全景（北方向から）

図版2

上田遺跡群塚状遺構遠景
（北方向から）

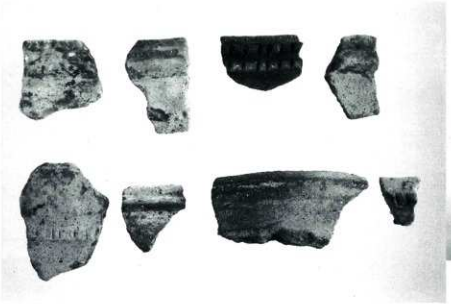
塚状遺構全景（西方向から）

塚状遺構北側土層（北方向から）

馬場遺跡遠景（北方向から）

溝１全景（西方向から）

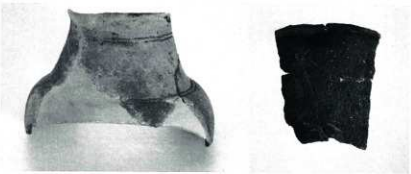
溝２全景（北東方向から）



1	2	3	4
6	5	7	17

8

9



15　16

14

10

18・19

20	21	22	23	24
	25	27	28	

26・29・30

30・31

1～10, 14～30(馬場遺跡)は第12・13図の遺物番号と対応する。
30・31(小林遺跡)は第4図1・2と対応する。

報 告 書 抄 録

ふりがな	こばやしいせき・うえだいせきぐん・ばばいせき
書名	小林遺跡・上田遺跡群・馬場遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第39集
編著者名	小林昭彦
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化センター
所在地	〒870-1113　大分市大字中判田1977番地
発行年月日	平成21年（2009）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
小林遺跡	日出町大字大神字小林	44341	220099	33°22′15″	131°34′18″	2007年5月21日 ～ 2007年5月23日	30	日出真那井杵築線交通安全事業
上田遺跡群	豊後大野市三重町大字上田原	44212	212002	33°1′00″	131°35′00″	2007年9月3日 ～ 2007年9月6日	68	百枝浅瀬野津線道路改良事業
馬場遺跡	豊後大野市千歳町新殿	44212	2122703	33°2′22″	131°36′00″	2007年5月28日 ～ 2007年6月1日	180	山内新殿橋梁整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小林遺跡	墓地	中世	墓	土師	
上田遺跡群	集落	弥生～古墳	塚状遺構		
馬場遺跡	その他	近世以降	溝・土杭	弥生土器・土師器・須恵器	弥生前期壺形土器出土

要約

[小林遺跡]遺構は木棺を埋葬主体とする中世の墓１基であった。この地域では僅少な事例。
[上田遺跡群]（上田原地区）遺構は径８m、高さ1.6mの規模をもつ、礫で被覆された塚状遺構。下部構造をもつものではなく、古墳ではない。おそらく近世以降の造営と推定される。
[馬場遺跡]溝３条と土杭１基を調査した。このうち溝１は６世紀後半である。溝２は底面近くから弥生前期の壺形土器が出土した。この壺形土器は、前期中葉頃と考えられる。大野川上中流域では初例となり当該型式の大野川中流域への波及を示すものである。

小林遺跡
上田遺跡群
馬場遺跡

— 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第39集 —

平成21年3月31日

編集・発行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市中判田1977-1
TEL097(597)5675

印　　刷　株式会社高山活版社
〒870-0943
大分県大分市片島301-1
TEL097(568)8227